

Title	通信：倉敷通信
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1932), 13(141): 40-40
Issue Date	1932-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/162296">http://hdl.handle.net/2433/162296</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

通	信
---	---

## 倉 敷 通 信

七月中頃から講習會について會員諸氏の御名前に親しんでゐたが、當日になると受講者四十名といふ盛況であつた。この内會員は、静岡縣の清水氏、津の藤川氏、大阪の井伊氏と河合氏、福山の石井氏と廣井氏、尾道の松本氏、廣島の毛利氏、柳井の満本氏、下關の廣津氏、香川縣の三崎氏、今治の飯氏、松山の相原氏、臺中の松本氏、岡山縣下では見藤、高木、中藤の三氏であつた。これに原名譽臺長、山本、水野正副會長、私を加へると21名になる。11日の記念撮影はいつまでもなつかしいものになるであらう。

14日には、大阪の大口君が神戸支部例會に出席して、足をのばして來訪された。同君の足ののばし方には敬服せざるを得ない。

翌15日には、廣島の大橋君と尾道の宮本君とが來られた。三人寄ると、花山の中村先生の御噂から天體寫眞のことを論議するのが常である。この日も大へんメイトルをあげてお互に利益するところが多かつた。太陽が西に低くなると、20錢の辨當ではあきたらないとあつて、カフェと申すところに出かけ、片假名の料理にサイダーのグラスを傾けた。友を迎へるよろこびはいふまでもないことであるが、この日のやうに、弗箱をひつさげた親しい友が遠方から訪ねてくれることは、支那の孔子様でなくても、たのしいものと思つたことである。

24日には、岡山の後閑君を迎へ、ぜいたくにも運轉時計をかけ、最高倍率600倍を奮發して、土星を觀望した。この夜は、倉敷でも稀に見るしづかな空で、縮緬環は勿論、カシニ溝の外部のあの細い空隙までもかすかにむさぼりたのしんだ。

26日夜、六高の東君が來訪された。近くにゐても度々會へない親しい觀測の友である。

花山の中村先生に賞められたのに力を得て、注意深く土星の撮影をつづけてゐる。そのうちとつても大成功のところを御目にかけたい。(荒木健兒)